

# 旅する工具屋



## 第二話：親切なお金持ちとよく喋るパパラッチ

旅した国が 20 カ国を超えた頃から、人と話す  
と必ずと言っていいほど同じ事を尋ねられる様  
になりました。「どこが一番良かった？」という  
質問です。正直なところ、この質問に対する回  
答はいつも同じではありません。話す相手や旅  
の目的、「良さ」の定義次第で答えは大きく変わ  
ってしまいます。でも、ほとんどの場合私はこ  
う答えます。「やっぱりモナコかな」と。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、モ  
ナコ公国は世界で 2 番目に小さい国です。面積  
は 2km<sup>2</sup> 程度で、坂は多いものの 1 日あれば簡  
単に歩いて周る事ができます。ではアクセスの  
方はいかがでしょう、多くの方がツアーバスか  
クルーズ船で来訪されるのではないのでしょうか。  
他の方法としては鉄道、タクシー、レンタカー  
など色々な方法がありますが、私は少し奮発し  
てヘリで空から入国しました。

フランスのコートダジュール空港内で発券を  
済ませると、空港の端にある人眼に着かないセ  
キュリティチェックへ。その後ミニバスでヘリ  
に向かうのですが、その中には既に先客が 2 人  
いました。話を聞いてみると女性はアメリカ人  
で毎年夏をモナコで過ごすとの事、そしてカウ  
ボーイみたいな装いの男性はオーストラリア人、  
モナコには仕事で頻繁に行くそうです。さぞか  
しリッチな商売だろうね、と軽く茶化して尋ね  
ると、彼は真顔で答えました。「リッチだね、こ  
の上なく」。私は今、自分がどこに行こうとして  
いるのかを改めて認識させられました。

艶やかな地中海を 5~6 分飛ぶと、ヘリは再び  
陸へと向きを変えます。この角度が絶妙で、夢  
の国モナコの全体像を見渡しながら入国できま  
す。着陸後は審査も無く、指定した場所までミ  
ニバスで運んでもらえました。予定より割と早  
く到着できたので大公宮殿周辺の観光を先に済  
ませ、私の足はすぐにモンテカルロ市街へと向  
かいます。

チェッカー模様の F1 スタートラインを横目  
に、第 1 コーナーのサンデボートを曲がり急坂  
を上るとカジノスクエアに出ます。ガルニ工設  
計のカジノ、オテルドバリに並ぶスーパーカー、  
天地を逆さに映す丸鏡、この場所に身を置いた  
瞬間の感動、興奮、気持ちの昂りは言葉にでき  
ません。



しばらく立ちすくんだ後、ふと目に留まった  
カジノ前のベンチに座りました。カラッと乾い  
た気持ちの良い空気の中、夢の場所で建物・車・  
人を眺めること 2 時間、白人の男性が私に話し  
かけました。「きみはクルマが好きなのかい？」

彼はラフな格好をしていましたが独特な佇いからリッチ・マンであることは間違いありませんでした。話を聞くと打合わせの合間に外の空気を吸いに出たそうです「暑いだろう、アイスでも食べよう」というとカフェドパリ横の店でレモン・ジェラートをご馳走してくれました。30分くらい話した後、彼はビジネスの場に戻って行きました。きっと彼も「この上なくリッチ」な世界の住人なのでしょう。

一通り F1 コースを歩いた後、ホテルへ荷物を置きレストランでオリーブとツナのピザを食べていると辺りは夕焼け色に染まってゆきます。食後にのんびり散歩しつつ、夜のライトアップされたカジノを見ようと再びエルミタージュ脇を上ると、異様な雰囲気の人だかりが道を塞いでいました。

近づいて見ると装飾の凝ったポールスタンドと、それを繋ぐロープが道を横切り、道路を一時的に閉ざしていました。そしてその向こうを思い切りドレスアップした貴族の様な人たちが歩いて行きます。すぐに気付いたのは、人だかりは塞がれた道が開くのを待っているのではなく塞がれた先にいる人たちを追いかけるパパラッチだということでした。

思わず目を細めてしまうほどの猛烈なフラッシュの嵐と、それを全く気にも留めず優雅に歩く「向こう」の人々。とてつもない異世界を呆けて眺めていると、横にいたパパラッチが場所を換わってほしいと頼んできました。快諾して「ところで何の集まりなの？」と聞いてみると、手際よく撮影をしながら「知らないのか！ Dior のパーティだ！あの深緑のスーツが〇〇で、横のイエローのドレスが▽△、パートナーの××は奥の…ほら、あそこだ！」と叫ぶように捲し立てて話してくれました。



正直なところ私にはどの名前も分かりませんでしたが、それに増して驚いたのは周りにいたパパラッチも何故か一緒に写真を撮りながら「◇◇は欠席したから来ないぞ」とか「～～のドレスは先月のパリと同じだ」など多種多様な情報を一斉に私へ提供し始めた事です。

セレブ達がオペラへ吸い込まれるとポールは取り去られ、パパラッチは次の撮影場所へ。時間にしてわずか数分の事でしたが、華やぐ広場と周囲の熱気、謎のエネルギーの突風みたいな煽りを受けた私はモナコを(少しだけ)身体で理解したような気がしました。

このような場面はモナコ滞在中多く見られました。そして滞在最終日の早朝に散歩をすると、気持ちの良い日射しとニコニコ笑顔で挨拶してくれるご年配の婦人たち、協会の鐘と鳥の鳴き声、まるでイタリアの長閑な田舎町の様な雰囲気です。サンドイッチを食べながら考え込んでしまいました、あの熱気・あの人々は今どこにいるんだろう、本当のモナコの姿とは…。

帰りのヘリから見たモナコは行きとは違い、華やかさの面を被った巨大な生き物の様に見えました。自在に表情を変える別天地、このようにして人はモナコに惹かれゆくのでしょうか。

文:17chandler